

『万葉集』『懷風藻』遣唐使関連詩歌小考 —「本郷」について—

岩田 久美加

一 はじめに

『万葉集』の時代、大陸との交渉に関しては、日本から遣唐使を派遣し、いわゆる朝貢関係を結び、朝鮮半島へは遣新羅使を派遣していたが、新羅に対しては「蕃国」と位置づけ、日本への朝貢を求めるといった関係にあった。また、新羅と緊張関係にあった渤海から使者⁽¹⁾がくるようにもなっていた。このような情勢の中、『万葉集』には、遣新羅使人の歌が巻十五には多くおさめられ、さらに遣唐使に関するうたも二十首ほどおさめられちる。また、『懷風藻』には、長屋王が新羅使人を招いた宴の時に作られた漢詩が十首ほど残されている。このように、海外との交渉に関する詩文が作られており、大陸との交流に関連して作品をつくることは、文学においても一つのテーマであったと考えられる。

しかしながら、そのような時代においても、「在一」というように題などに確実に在外地で営まれたことが記される文学作品は多くは残っていない。次にあげる『万葉集』と『懷風藻』の作品が全て⁽²⁾である。

山上臣憶良在大唐時憶本郷作歌

I いざこども はやくやまとへ おほどもの みつのはままつ まちこひぬらむ
去来子等 早日本邊 大伴乃 御津乃濱松 待戀奴良武 (①六三)

II 五言 在唐憶本郷 一絶。

日邊瞻日本。雲裡望雲端。遠遊勞遠國。長恨苦長安。 (釈弁正)

日辺日本を瞻、雲裡雲端を望む。遠遊遠國に勞し、長恨長安に苦しむ。

III 五言 在唐奉本國皇太子。

三宝持聖徳。百靈扶仙壽。壽共日月長。徳与天地久。 (釈道慈)

三宝聖徳を持し、百靈千寿を扶く。寿は日月を共に長く、徳は天地と久し。

1～Ⅲは、全て唐に在ってよまれた作品であり、作者の1山上憶良・Ⅱ釈弁正・Ⅲ釈道慈らは、全員大宝元年(七〇一)正月二十三日に任命された第七次(大宝度)遣唐使である。また、ともに「日本」を指しているⅠⅡの「本郷」、Ⅲ「本国」といった表現の類似性が指摘されており、特に1とⅡは題詞の「憶本郷」などの表現や、うたの内容が共に望郷のうたであることなどから、同じ場で披露された⁽³⁾との指摘もある。

ところで、「本郷」も「本国」も諸注「故郷」としか注を付していない⁽⁴⁾ことが多い。そのような注の付され方の中で、伊藤博⁽⁵⁾は「本郷」について、「「本郷」は「故郷」「故地」などより改まった言い方で、外（と）つ国にあってはるかなる本国をさす場合が多かった」と指摘している。確かに、次章以降取り上げるように、「外国においての本国」を指すことは多いが、そうではない場合も多い。従って、本論では、「本郷」という表現はどのように上代文献の中で用いられているか確認し、その表現はどのように形成されたかを明らかにしたい。そうすることで、「本郷」という表現がどのような意味を持ち、『万葉集』や『懷風藻』という文学作品の中で、ⅠやⅡの作者はどうして「本郷」という表現を選び取ったかを考えたい。

二 『万葉集』の「本郷」について

『懷風藻』には当該詩以外に「本郷」の語はない。それに対して『万葉集』に「本郷」は、当該歌をのぞき、次の三例がある。

1 安貴王の歌一首<并せて短歌>

遠妻の ここにしあらねば 玉杵の 道をた遠み 思ふそら 安けなくに 嘆くそら 苦しきものを み 空行く 雲にもがも 高飛ぶ 鳥にもがも 明日行きて 妹に言問ひ
我がために 妹も事なく 妹がため 我も事なく 今も見ると たぐひてもがも
(④五三四)

反歌

しきたへの手枕まかず問置きて年そ経にける逢はなく思へば (④五三五)
右、安貴王、因幡の八上采女を娶る。係念極まりて甚しく、愛情尤も盛りなり。時に、勅して不敬の罪に断め、本郷に退却らしむ。ここに、王の心悼み怛びて、聊かにこの歌を作る。

2 筑紫の館に至りて本郷を遙かに望み悽愴きて作る歌四首

志賀の海人の一日もおちず焼く塩の辛き恋をも我はするかも (⑮三六五二)
志賀の浦にいざりする海人家人の待ち恋ふらむに明かし釣る魚 (⑮三六五三)
可之布江に鶴鳴き渡る志賀の浦に沖つ白波立ちし来らしも (⑮三六五四)
一に云ふ「満ちし来ぬらし」
今よりは秋付きぬらしあしひきの山松陰にひぐらし鳴きぬ (⑮三六五五)

3 帰る雁を見る歌二首

燕来る時になりぬと雁がねは本郷^{くに}思都追雲隠り鳴く (⑲四一四四)
春まけてかく帰るとも秋風にもみたむ山を越え来ざらめや <一に云ふ「春されば帰るこの雁」> (⑲四一四五)

1の左注は、詠歌状況を説明しており、志貴皇子の孫かと言われている安貴王（持統六年（六九四）頃生まれたか）が、因幡国の八上采女を娶り、とても愛していたが、王は勅命により不敬罪に問われ、「本郷」に帰された。そのため王が悲しんで作ったうたであるということ表現している。ここで「本郷」に帰されたのは、①八上采女と②安貴王と説が分かれているが、「勅」により「不敬」の罪に問われ、「本郷」に帰ったのである。采女との恋は、『万葉集』の次のうたに表現されているように、臣下との恋は禁じられており、次の鎌足のうたのように特別な許可を得た者だけが許されたのであった。

内大臣藤原卿、采女の安見兒を娶く時に作る歌一首

我はもや安見兒得たり皆人の得かてにすといふ安見兒得たり (②九五)

そのように考えると、この「本郷」はいわゆる「本貫の地」ということを意味していると考えられよう。

2は、『万葉集』巻十五に収録されている所謂「遣新羅使人歌群」の中にある歌群である。この「遣新羅使」は、天平八年（七三六）に派遣され、翌年天平九年（七三七）に帰朝している。2の歌群は、新羅への往路、「筑紫の館」（海路を利用する官人や外国使節のための公的な宿泊施設）で、「本郷」を望んで懐愴で作ったうたであるという題詞に用いられている。つまり、「本郷」に対しての望郷の思いをよんだうたであることを題詞は示しているのである。そして、三六五二歌では「辛き恋をも我はするかも」と、「家」に残していった妻か妹などを恋しく思い、「本郷」にいる家人を偲んだという望郷歌が記されている。従って、この「本郷」は「家人」がいるところである。この2の題詞の「本郷」について、先に一でも触れたが、伊藤博は次のように釈文で述べている。

「本郷」とは^{ねもと}根本の国、故国の意。あまり用例に恵まれないけれども、山上憶良が大唐に在って詠んだ歌（1六三）の題詞に「本郷を憶ひて作る歌」とあり、欽明紀十六年（五五五）二月、日本国にある百濟王子に対する下問の中に、「為当此間に留まらむと欲ふや。為当本郷に向なむと欲ふや」と見える。また『仏教語辞典』によれば、仏典では、自己本具の心性を示すほかに、中国在住の印度僧が本国をさしている場合もあるという。『後漢書』（章帝紀）に「其後欲還本郷者勿禁」と見える例は、中国内のその人の元々住んでいた所、すなわち、いわゆる故郷をさすけれども、帝の詔勅の中での、庸役に駆り出された人びとに対する語であることに留意すべきである。「本郷」は「故郷」「故地」などより改まった言い方で、外つ国にあってはるかなる本国をさす場合が多かったことだけは確かである。（下線は稿者による。以下同じ。）

そして、2の「本郷」について次のように述べている⁽⁶⁾。

今の歌群の「本郷」にも同じ雰囲気がある。ここは、都のある大和、つまり奈良の都をさしていること、いうに及ばない。その故郷を筑紫の館にあってさすのに「本郷」と称している。一語には、奈良の都を、異国にあって遠くを思いやる感覚があるというべきだろ

う。遣新羅使であるがゆえに、異国新羅に赴くという立場、外つ国新羅への意識を心底に秘めるという立場が、ここにかような言葉を登場させるに至ったものと思われる。したがって、今の歌群には、すでに題詞に、奈良の都を異国での本国と見るような深い望郷の念が託されており、「秋」には「妹」に^{ママ}の思いを告げる三六五五の歌をもって結ぶ歌群四首もそれに対応しているわけである。「はるかに本郷を望み」における「望む」が遠く見はるかす、遠く慕い思う意であることはいうまでもない。

確かに、伊藤が指摘することはその通りである。しかし、「異国新羅⁽⁷⁾に赴くという立場、外つ国新羅への意識を心底に秘めるという立場」が「大和」をさして「本郷」という表現を選び取らせたと言い切ってしまうと良いのかは、遣新羅使たちがまだ筑紫におり、「異国」にいるわけではないのだから考えなければならない。

3は、『万葉集』中で唯一「本郷」をうたの本文中に用いたもので、上代では珍しい「帰雁」をよんだ大伴家持のうたである。燕の来る季節になったと雁が「本郷」を偲びながら雲隠れに鳴き渡っていくといううたである。小島憲之⁽⁸⁾は、3に関連し、この「本郷」について、「家持の春の帰雁の歌も、春の空にその群影を実際に観察すると同時に、『帰雁』という詩的素材と相結ばれた結果でなかったか」と推測し、原文「本郷」について「詩的なにおいが強い」としている。そして、それを受けて伊藤博⁽⁹⁾は、ここの「本郷」についても、「ここ越中の日本を異郷と見ていったもの」と注を付し、語釈で「本郷」とは「雁の本来の生息地」をさしているとしている。確かに、3の「本郷」は雁が夏を過ごす北方の地である。但し、「本郷」という表現は、管見の限りでは、漢詩においては王昌齡（六九八年－七五五年、開元十五年（七二七年）に進士となる）の「箜篌引」が一番古いと思われる。従って、小島のいうように「詩的」な表現とは言えないのではないか。また、「本郷」と類似した表現でⅢの「本国」という表現もある。

三 史書と律令における「本郷」について

次に、『日本書紀』『続日本紀』の例をあげる。

- 4 是に火火出見尊を大鰐に乗せて、本郷に送致りまつる。 （『紀』第十段一書第一）
- 5 十六年の春二月に百済の王子余昌、王子恵を遣して、〈王子恵は威徳王の弟なり〉、奏し曰さく「聖明王、賊の為に殺されぬ」とまをす。〈十五年新羅の為に殺さる。故、今し奏すなり。〉天皇、聞しめして傷恨みたまひ、廻ち使者を遣して、津に迎えて慰問はしめたまふ。／是に許勢臣、王子恵に問ひて曰はく、「為当此間に留まらむと欲ふや。為当本郷に向なむと欲ふや」といふ。 （『紀』欽明天皇十六年（五五五）二月）
- 6 十七年の夏四月の丁酉の朔の庚子に、筑紫大宰、奏上して言さく、「百済の僧道欣・恵弥首と為りて、一十人、俗七十五人。肥後国の葦北津に泊つ」とまをす。是の時に。難

波吉士德摩呂・船史竜を遣して、問はしめて曰く、「何が来し」といふ。対へて曰く、「百済王、命せて呉国に遣す。其の国に乱れ有て入ることを得ず。更に本郷に返る。

(『紀』推古天皇十七年(六〇九)四月庚子)

- 7 九月に、皇太子、長津宮に御しましし、織冠を以て百済王子豊璋に授けたまふ。復、
おほのおみこもしき多臣だいせんげ 蔣敷の妹を以て妻にあはす。乃ち大山下狭井連檣榔・小山下秦造田来津を遣して、軍五千余を率て、本郷に衛送らしむ。

(『紀』天智天皇即位前紀齐明天皇七年(六六一)九月)

- 8 癸巳。流れ来りし新羅の人、福護らに付けて本郷に還す。

(『統紀』大宝三年(七〇三)五月癸巳(三))

- 9 丙申、禁制すらく、「畿内と近江国との百姓、法律を畏れず、浮浪と逃亡せる仕丁等とを容れ隠して。私に驅り使へり。是に由りて、多く彼に在りて、本郷・本主に還らず。

(『統紀』和銅二年(七〇九)十月丙申(十四))

- 10 戊戌、詔して曰はく、「沙門行善は笈を負ひて遊学すること既に七代を経たり。備さに難行を嘗めて、三五の術を解りて、方に本郷に帰れり。

(『統紀』養老五年(七二一)六月戊戌【廿三】)

- 11 また勅したまはく、「唐僧道榮、身は本郷に生れて、心は皇化に向ひ、遠く滄波を涉りて、我が法師と作る。

(『統紀』天平元年(七二九)八月癸亥【己未朔五】)

- 12 是の日。筑紫の防人を停め、本郷に帰へし、筑紫の人を差して、壱岐・対馬を戌らしむ。

(『統紀』天平九年(七三七)九月癸巳【申朔廿二】)

- 13 其れ、流人、穂積朝臣老、多治比真人祖人・名負・東人、久米連若女等五人、召して京に入らしめよ。大原采女勝部鳥女は本郷に還せ。

(『統紀』天平十二年(七四〇)六月庚午【丙辰朔十五】)

- 14 朕、此を念ひて、深く憫矜を増す。京国の官司に仰せて、糧食・医薬を量り給ひ、勤めて検校を加へ、本郷に達らしむべし。若し官人怠緩して行はぬ者有らば、違勅の罪に科せむ」とのたまふ。

(『統紀』天平宝字元年(七五七)十月庚戌【乙巳朔六】)

- 15 八月乙卯、勅したまはく、「唐の人沈惟岳らは府に着け、前例に依りて安置供給せよ。その送る使は、海・陸二路、便を量りて咸く京に入らしめよ。水手は彼より本郷に放ち還らしめよ」とのたまふ。

(『統紀』天平宝字六年(七六二)八月乙卯【丁未朔九】)

- 16 金才伯ら言して曰はく、唐国の勅使韓朝彰、渤海より来りて云はく、「日本国の僧戒融を送りて本郷に達らしむること已に畢りぬ。若し平らけく安けく郷に帰らば、報信有るべし。而るに今日に至るまで寂として来音無し。宜しくこの使を差して、その消息を天子に奏しめむと欲ふ」といふ。

(『統紀』天平宝字八年(七六四)七月甲寅【十九】)

- 17 また、この地は祁寒にして積雪消え難く、僅に初夏に入りて調を運びて上道す。山に梯し海に帆けて艱辛備に至れり。季秋の月に乃ち本郷に還る。民の産を妨ぐることを、此よ

り過ぎたるは莫し。望み請はくは、輸せる調・庸は国に収め置き、十年に一度、京庫に進み納めむことを」とまうす。（『統紀』神護景雲二年（七六八）九月壬辰【廿二】）

- 18 是に官判して、陸奥の国司、下野国使と共に、意を存きて検括して、本郷に還却さしむ。（『統紀』宝亀三年（七七二）十月戊午【十一】）

- 19 是に由りて朝廷に召さずして、本郷に返却す。（『統紀』宝亀四年（七七三）六月戊辰【廿四】）

- 20 王、朝聘を典故に修め。宝曆を惟新に慶ぶ。懃懇の誠、実に嘉尚すること有り。但し都蒙ら比の岸に及ぶ此、忽に我風に遇ひて人・物を損ふこと有り。船の駕り去るもの無し。彼を想ひ此を聞きて、復懷を傷ましむ。言に越郷を念ひて、倍軫悼を加ふ。故に舟を造り使を差して、本郷に送り至らしむ。

（『統紀』宝亀八年（七七七）五月癸酉【廿三】）

- 21 於に、諸司の仕丁・駕輿丁等の厮丁と三衛府の火頭等とは、徒に庸調を免して公家に益すること無し。遠く本郷を離れて、多く私業を破れり。仍ち本色に従ひて農畝に赴かしむ。（『統紀』宝亀十一年（七八〇）三月辛巳【十六】）

- 22 乙巳、勅したまはく、「河内国若江郡の人弓削浄人・広方・広田・広津ら、去りぬる宝亀元年土左国に配さる。その罪を宥して本郷に放し還すべし。但し京に入ること得ざれ」とのたまふ。（『統紀』天応元年（七八一）六月乙巳【十八】）

史書においては、『古事記』には例がなく、4の『日本書紀』の例のみが神代巻である。従って、まず4の例をのぞいて、次のように分類できよう

A 外国の人が日本に到来している時に「故郷」を「本郷」と表現する場合。ただし日本の人が在外地にあるときは、「故郷」を「本郷」と表現する場合。

5・6・7・8・10・11・15・16・19・20

B 防人などが「故郷」を離れている時に「故郷」を「本郷」と表現する場合。

9・12・13・14・17・18・21・22

従って、必ずしも伊藤がいうように「外国にあつて外つ国」を表現することが多いというほどではないのである。どちらかと言えば、勅命や律令に定められた規定に沿って、「本郷」に還されたりする時に用いられていると言えよう。実際に復元された「養老令」に次のような例がある。

- 23 凡行軍兵士以上。若有身病及死者。行軍具録隨身資財。付本郷人將還。其屍者。当処焼埋。但副將軍以上。將還本土。（『令』軍防令40行軍兵条）

- 24 凡防人向防。及番還。在道有身患不堪涉路者。即付側近国郡。給糧并医藥救療。待差堪行。然後發遣。仍移本貫及前所。其身死者。隨便給棺焼埋。若有資財者。申し送兵部。令將還本家。（『令』軍防令61防人番還条）

- 25 凡丁匠往来。如有重患不堪勝致者。留付隨便郡里。供給飲食。待差發遣。若無糧食。即

給公糧。凡丁匠赴役身死者。給棺。在道亡者。所在国司。以官物作給。並於路次埋殯。立牌。并告本貫。若無家人來取者燒之。有人迎接者。分明付領。

(『令』賦役令32賦役身死条)

23は行軍兵が途中で兵が亡くなった場合、「本郷」の人に付けて持ち物を返還せよ⁽¹⁰⁾という条文である。24は防人が帰る途中で亡くなった場合は、「本貫」に移すというものである。また25は、丁匠が賦役時に死に、道で亡くなった場合は、棺を作り埋めて、碑を建て、「本貫」に告げよという条文である。ここの「本貫」について、「本籍地」と注し、条文に関して「唐令の用語をそのまま継受したか」⁽¹¹⁾とある。そのように考えるならば、24・25と同じく役務中に亡くなった人について記しているのだから、23の「本郷」も「本籍地」であると考えられよう。すると、Bは「本籍地」つまり「本貫の地」を意味していることになる。なお、「大宝令」に「本郷」という表現があったかははっきりとは確認できない⁽¹²⁾。

四 漢籍と仏典

このような「本郷」という表現をどのように捉えたらよいだろうか。日本における使用は『日本書紀』『続日本紀』がはやいが、『日本書紀』(七二〇年制定)を考えると、ⅠⅡの使用の方がはやい。『日本書紀』に関しては、4の海幸山幸の十段一書をのぞいては、Aは、欽明朝以降で百済・新羅など外つ国の人物を本国に送り返すという政府の命令が中心である。その後『続日本紀』ではそのような例以外に、Bの逃亡した農民などの「本郷」といった表現が多くなる。このようにABともに律令語として上代においては存在していたと考えられよう。史書と同じように『万葉集』や『懷風藻』の例を分類すると、AがⅠ・Ⅱ・(2)・3、Bが1となる。

では、その表現はどこからⅠⅡの作者は摂取したのであろうか。三で確認したように「大宝律令」やその藍本である「唐律」「唐令」に、確実な「本郷」という表現はない。諸注⁽¹³⁾は次の例を引いている。

26 其後欲還本郷者、勿禁。(『後漢書』卷三 紀第三)

これは、移住者に「本郷」に帰りたいものがいれば、禁止するなという文脈の詔である。

また、その他にも漢土には次のような例もある。

27 若標題猶存，姓字可識，可即運載，致還本郷。(『南齊書』卷二 本紀第二)

これは、戦乱や災害が続き死者が放置されている状況に対して、皇帝が「もし標識が残っており、名前や姓が確認できる場合は、遺体を運び、本郷に返すようにせよ」と詔を出したものである。

28 庚子、詔討華皎軍人死王事者並給棺槨，送還本郷。(『陳書』卷四 本紀第四)

これは、華皎討伐の戦いで戦死した兵士たちに対し「棺や槨を与えて故郷に送」らせるとい

う皇帝の詔である。

26・27・28の例以外にも「還本郷」という表現は漢土の史書に数例存在する。これらの例を見ると、「本郷」というのは、「本貫の地」であり、「死した後」でも帰るべき所であると位置づけられており、単に「出身地」を意味しているのではない。なお、死者や逃亡者に対してそのような詔などが発布されるのは、六朝期における国土の混乱によるものであろう。

ところで、仏典にも「本郷」という表現は多く出てくる。先の伊藤博の引用中の『仏教語辞典』によれば、仏典では、自己本具の心性を示すほかに、中国在住の印度僧が本国をさしている場合がある⁽¹⁴⁾という。

29 賢守静不與衆同後語弟子云我昨見本郷有五舶俱發 (『高僧傳』卷第二)

これは、北インド出身の東晋で活躍した訳経僧である仏陀跋陀羅の伝の中の一つのエピソードである。ここでは仏陀跋陀羅が「本郷」の夢を見たとしているが、それは出身地の意である。ただ、ここは夢に見るほどの思いが「出身地」である「本郷」にあることを意味しているのかもしれない。

30 本郷風範、難可縷言。 (『南天竺婆羅門僧正碑并序』)

これは、神護景雲四年(七七〇)に弟子によって記述されたインド出身の菩提僊那の碑文に記述された文章であり、ここの「本郷」は菩提僊那の出身地であり、そこでの僧正の姿は詳しく述べるのは難しいと記されている。

29から分かるように、出身地を示すタームとして「本郷」は使用されており、伝記を記すための用語として漢土で確立しており、30から日本においても僧伝を記すときのタームとして使用されていたことが分かる。ただし、この用法の「本郷」は当時日本に確実に将来していた仏典にはそれほど多くは見られない。

このように、「本郷」という語は『日本書紀』や『続日本紀』で使われている用語で、律令語であり、また仏典における伝記を記すためのタームでもあった。但し、律令で「本郷」という語が用いられるのは、ⅠやⅡよりも後である。また、先に指摘したように、詩語としては確立しておらず、漢土の史書や仏典にも「本郷」という語はあるが、「出身地」などの意味での用法は多くはない。その一方、Ⅲで用いられている「本国」という語は『万葉集』や日本の史書にも数多くある。そのような状況を鑑みると、大宝度の遣唐使が派遣された当時においては「本郷」という語は一般的な言葉ではなかったと考えるのが穏当であろう。それではⅠの憶良はどのように知ったのであろうか。Ⅱの漢詩も題に「本郷」が使用されていたことも考え合わせると、同じく遣唐使として派遣された実務官僚若しくは僧侶との交流の中から憶良自身が、公的な命令により任務として他郷にいる人間にとっての「故郷」という意味を強く意識して撰びとった表現であったと考えられよう。さらに、「憶……」という形式で「憶」の字を使用して題詞にする例は『万葉集』中では憶良が最初であり、他は憶良と交流があった旅人とその息子である家持しか使用していない。そして、漢土の史書で「本

郷」という語は、「還本郷」という表現で多く用いられていたことより、同じく「故郷」を意味する「本国」という語とは異なり、「死しても帰るべき地」として位置づけられ、望郷の念を思い起こさせる表現として選び取ったのではなかろうか。このことは、望郷の思いが述べられていないⅢの漢詩では同じく「故郷である日本」を「本国」と表現していることから明らかである。

五 まとめにかえて

ところで、少し時代は下がるが、次のような「本郷」に関する記述がある。

- 31 衆僧は外国の僧に対して導う、「今日は冬至節和尚万福、伝燈絶えずして早く本国に帰り、長えに国師となれ云云」と。各相礼拝し畢って、更に「嚴寒」を導う。或る僧は来たって云う、「冬至、和尚万福、学は三学に光き、早く本郷に返って常えに国師と為れ云云」と。
(『入唐求法巡礼行記』)

31は、円仁が唐の冬至節の時に、当地の僧に声を掛けられたのを記述している。ここから、当時の唐においてはすでに「本国」と「本郷」に使い分けはなされておらず、「母国」とか「故郷」といった意味であったといえよう。すると、ⅠやⅡの「本郷」という表現は、大宝度の遣唐使周辺で漢籍や仏典の表現から「本郷」という言葉を知り、それを独自に新たな「任務により他郷にいる人間に望郷の念を思い起こさせる故郷」という意味で新たに捉え直された言葉であったと言えよう。従って、先にあげた1の左注は律令語として定着していたであろう奈良朝において記されたAに属する表現であり、2は「遣新羅使」という任務につき、故郷を離れ望郷の念を有する者によって選ばれた表現であり、3も任務として越中にいた家持自身の比喻として「帰雁」は位置づけられており、「雁」の望郷の思いを表現するために「本郷」という表現がうたのなかで用いられたといえよう。

以上から、「本郷」という表現は、律令制度が確立し、他郷との人の往来が激しくなり、その中でも、遣唐使というそれまで三〇年以上なかった、遠い異郷の地への公務に着くという状況下で選び取られ、新たに意味づけされた、表現であったことが分かる。それは小島がいう「詩的なにおいが強い」⁽¹⁵⁾ というのとは異なり、憶良によってえらびとられた「本郷」という表現が、『万葉集』のうらにおいては、その後新たに意味を有する「うたことば」として受け継がれたのではないかと考えられる。

-
- (1) 東茂美「環日本海の情勢と「好去好来歌」の創作」『山上憶良の研究』（翰林書房）二〇〇六年一〇月に詳しい。
- (2) なお『古今和歌集』の仲麻呂、『懷風藻』の「憶花鳥」は唐において作られた作品と思われる。しかし、「在唐」という表現がなされておらず、今回は考察の対象から外す。
- (3) 中西進「朝元」『中西進 万葉論集 第四卷 万葉史の研究（上）』（講談社）一九九六年三月
- (4) たとえば、新編日本古典文学全集『万葉集①』（小学館）など。
- (5) 『万葉集釈注 八』（集英社）
- (6) 注（5）同書
- (7) 注（5）同書
- (8) 「春の雁」日本古典文学全集『万葉集』③（小学館）
- (9) 『万葉集釈注 十』（集英社）
- (10) 大日本古記録には「節度使符参拾貳条」の天平五年（（正集30断簡21／592～598））に次のような記録がある。
「十一月/一十五日符壹道〈造弩生大石村主大国付前様却還~~不~~郷状〉以十一月卅日到国」
これは、23と同様に造弩生を本郷に還すことが記されている。
- (11) 『日本思想大系 律令』『軍防令』頭注
- (12) 「大宝令」の藍本は「永徽律令」であるが、『唐令拾遺』及び『唐令拾遺補』によっても確認できない。
- (13) 辰巳正明『懷風藻全註釈 増補版』（花鳥社）など。
- (14) 注（9）同書
- (15) 注（8）同書

*本文については、『万葉集』塙書房『CD-ROM 万葉集』に、『古事記』『日本書紀』は『新編日本古典文学全集』（小学館）のそれらに、『続日本紀』は『新日本古典文学大系』（岩波書店）に、『律令』は『日本思想大系』のそれに、『入唐求法巡礼行記』は『東洋文庫』のそれにより、漢土の史書については、それぞれ中華書局の本文によった。但し、一部私に訓を付し、字を改めたところもある。

なお仏典に関しては、テキストDB: SAT大正新脩大藏經テキストデータベース2018版（SAT2018）
<https://21dzk.lu-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php> の本文検索の恩恵にあずかり、また本文もこれによった。